

エッセイ

手紙に見る独眼竜正宗
の素顔

榎 良生

1. はじめに

伊達政宗と聞くと皆様どのような思いを抱かれるだろうか。三日月型の兜や右目の黒い眼帯(実際、

眼帯は付けてはいなかった!)、更には派手な「伊達者」としてのパフォーマンスなど人それぞれ様々なイメージを思い浮かべることだろう。私は仙台生まれでもあり、幼少時より政宗に興味を尽きなく政宗のみならず長男の宇和島藩主秀宗、二男で仙台藩を継いだ忠宗、伊達騒動の主役となった十

男兵部宗勝などについてもいろいろと勉強を進めていた。その中で、政宗自身が相当な筆まめであったことが、佐藤憲一氏の著書『伊達政宗の手紙』(新潮選書)により知ることができた。これが非常に面白く、自ずと政宗の人柄が偲ばれるのである。今回はその手紙を通して、戦国から江戸初期を遅く生き抜いた彼の素顔に迫ってみたいと思う。

2. 戦国の雄 政宗の生涯

それでは政宗の生涯をざっと辿って行くことにしよう。伊達政宗は永禄10年(1567年)出羽の国米沢城で16代当主輝宗の嫡男として生まれた。13歳の時に三春城主田村清顕の娘である愛姫を正室に迎えている。天正13年(1585年)家督を相続し、17代当主となった。天正15年(1587年)豊臣秀吉は関東、奥羽の諸大名に対して惣無事令を出して私戦禁止を通達したが、政宗はこれを無視し、同17年(1589年)には会津の葦名義広を磐梯山麓で破り(摺上原の戦い)、南奥羽の広大な地域を領有するに至ったのである。若干23歳にし

て、領国はおよそ150万石であつたとされる。

秀吉は政宗に対して上洛し恭順の意を示すように再三要求していたが、北条氏との関係もあり態度を明確にしていなかった。しかし、天正18年(1590年)小田原攻めが開始されると、政宗はついに参陣を決意して会津を出立したのである。途中、越後、信濃、甲斐を経由して実に4か月もの遅参となつた。政宗は伊達家の本領12郡72万石は安堵されたものの、会津領は没収されている。そのうち、秀吉による奥州仕置きにより新たな領主となつた木村氏に対して、改易となつた葛西、大崎氏らの旧臣が反乱を起こした。蒲生氏郷との不仲もあり、この一揆を扇動したとして政宗はまたも疑われて窮地に陥つた。ようやく許されたものの本領12郡のうち、6郡(長井、信夫、伊達、安達、田村、刈田)44万石を没収され、葛西・大崎30万石を得たものの所領は58万石に減封となつたのである。

関ヶ原合戦の時、家康より自軍に味方すれば百万石を与えるという「お墨付き」をもらっていたが、戦が1日で決着し、どさくさ紛れ

の行動（和賀一揆）が咎められて約束は反故にされた経緯があった。それでもわずかに加増されて62万石の仙台藩主となったのである。

このちは徳川三代に仕えて、外様でありながらこれをバックアップするようになっていくのである。

三代將軍家光は戦国以来の武将として政宗を尊敬しており、御前での脇差帯刀も許したと伝わる。政宗が亡くなったのは、寛永13年（1636年）、江戸桜田藩邸で享年70歳であった。家光は江戸で7日、京都で3日喪に服するよう異例のお達しを出したという。

3. 部下への見舞状

それでは、本題の政宗の手紙のことに移ろう。筆まめな政宗は自筆の手紙をおよそ千通残している。当時の手紙は大名あたりになると、右筆（ゆうひつ）という秘書が代筆して、大名本人は花押というサインをするのが普通だった。現存するのが千通ということは、実際にはその何倍もの自筆の手紙を書いていたと思われるのである。その相手も家族や部下に留まらず、大名や公家など非常に広範囲に及んでおり、内容が大変興味深いの

である。その中で部下に充てた1通を紹介するとしよう。これは弓田右馬充（うまのじょう）に宛てた短い見舞状である。

弓田右馬充宛

其身この度の煩ひにて、もし相候はて候とも、兩人の子ども引き立て召し使ふべく候。心安く養生をも仕るべく候。謹言。

正月十日

政宗（花押）

弓田は療養中だったのである。う。そちに万一のことがあっても、二人の子供たちをしつかりと使つてゆくので、安心して養生してほしいと政宗は伝えたのである。弓田の知行は180石ほど、中級の武士で大坂夏の陣では豊臣方の後藤又兵衛隊と激戦を展開し、槍で活躍したのであった。62万石の太守が180石の武士に自筆の手紙を書いた。これまでの彼の働きに応える政宗の熱い思いがひしひしと伝わってくるのである。

私事で恐縮なのだが、昨年11月に小生に前立腺がんが見つかった。1月に手術をして入院すると2週間、このエッセイを書いてある今（2月）もなお療養中であ

る。61歳の小生は小さな会社で総務・経理などを担当しており、3〜4月にかけては1年で一番の多忙な時期となる。果たして3月までには回復できるだろうか。仕事に復帰することは可能だろうか。職場の人は快く受け入れてくれるだろうか。今の自分は療養中の人の気持ちがよく理解できるのである。封建社会においては尚更であったと思われる。この手紙をもらった弓田は何より嬉しかったことだろう。政宗はこの約束を守り、後に息子に後を継がせた。弓田家ではこの手紙は家宝として四百年間大切に保管されたのであった。

4. 終わりに

手紙は人を表すという。政宗の家族に充てた手紙を読むと愛情にあふれ、良き家庭人であったことが偲ばれる。ちよつと横道に逸れるが、秀吉もまた良き家庭人であったことが彼の自筆の手紙から推測される。中でもとりわけ正妻のおね（北の政所）宛てのものが多い。朝鮮出兵の折、肥前名護屋から書いた手紙には、大坂にもうすぐ帰つたら、「ゆるゆるだ（抱）きやい候て、物がたり申すべく候。」と

赤裸々に書かれているのである。当時の秀吉には淀殿をはじめ多数の側室がいたはずだが、この糟糠の妻を大切にしていたことが伺われるのである。

政宗が十男宗勝に充てたものは微笑ましい。宗勝は13歳、政宗は67歳ごろのものとみられる。宗勝は能を学んでおり、父と一緒に舞う予定になっていたのだろう。紙面の都合で本文は省略するが、概略は次のとおりである。雨で楽しみにしていた能が延期されて残念だが、途中で降られたよりも夜中から降つたので良かった。明日は晴れるだろう。（追伸）この手紙の返事は是非とも自筆で書くのだよ。自分で書かないと上手にならないよ、というものである。政宗は自筆の手紙の重要さを認識しており、息子たちにもそのように教育していたのであろう。また、末っ子に対する愛情も垣間見えるのである。なお、この伊達兵部宗勝は後に藩主の後見として仙台藩の実権を握ったものの、その後の伊達騒動（寛文事件）の首謀者として処断されて、土佐に配流となり、延宝6（1678）年、彼の地で死去した。享年59歳であつ

た。長く原田甲斐とともに御家騒動の悪役として扱われてきたが、近年の研究では藩財政の救済のために藩政改革を急ぎすぎたことに對する反発の犠牲者との見方も出ているのである。当時の仙台藩は拝領地を家臣に耕させて年貢を徵収する地方知行制（じかたちぎょうせい）という古い統治形態で、保守的な風土を醸成していたのであった。

政宗の手紙はこのような微笑ましいものだけではない。大名や公家に充てたものは勇ましいものや適格に情勢を分析した提案のようなものなど様々である。部下に對しても上記の優しい見舞狀に對して、厳しい姿勢を示した手紙もまた存在するのである。要するに政宗という人物は戦国を生き抜いた軍略・外交に長けている武將というだけでなく、和歌や漢詩などにも通じる教養人でもあった。また、家族や部下をこよなく愛するきめ細やかな気配りもできる人だったのである。

【参考文献】

「伊達政宗の手紙」

（佐藤憲一著・新潮選書）

「仙台藩ものがたり」

（河北新報社編集部編）

「伊達政宗、最期の日々」

（小林千草著・講談社現代新書）

「Kapdo 2017. 9月号」

（伊達政宗の人間力）

（プレスアート社編集）

「太閤の手紙」

（桑田忠親著・講談社学術文庫）



【筆者紹介】平成24年入会。大坂府箕面市出身、鎌倉市在住。現役で活躍中ですが、神奈川歴史研究会（事務局長）、江戸の歴史研究会に所属され、御多忙な日々を過ごされています。

ご趣味は歴史探訪、うまいもの探し、居酒屋巡りとのことです。